



今年の第22期地球環境大学は、「見つけたよ、これも温暖化のせい!？」をテーマとして座学の講座3回、課外の講座3回を予定しています。7月26日(土)13:30～16:30には、第1回講座「観測結果からわかる近畿地方の温暖化と農業の影響」を、大阪歴史博物館 研修室1で開講しました。

講演 「気象台の観測結果からわかる近畿の気候変動」 山本 善弘さん(大阪管区気象台地球温暖化情報官)

大阪管区気象台のホームページ^{*1}「近畿地方の気候変動(2013年版)」から選択して大阪府の気候変動データを取得することができます。

100年あたりの気温上昇について日本では1.14℃ですが、近畿は1.75℃、大阪は1.96℃で都市化の影響がみられます。大阪の猛暑日は10年で3.1日、熱帯夜は10年で5.8日増えています。さくら開花は50年あたり5.8日早くなっているなど、さまざまな気候変動の影響が出ています。



報告1 「果樹栽培農家からみた温暖化の影響」

宇田 篤弘さん(紀ノ川農協組合長)

私たちが栽培している、柿、みかん、ぶどうなど、果樹への温暖化の影響と思われることは次のとおりです。ただこれら果樹の高温に対する対策には最低5年はかかり、生産者の高齢化が進む中、移行が難しいのが現状です。

柿(平たねなし柿、富有柿)	日焼け果が多くなった。
温州みかん	日焼け果、浮き皮、品質ばらつき、味の劣化。
ピオーネ	着色遅れ。



報告2 「野菜栽培農家からみた温暖化の影響」 位 松三さん(フレッシュ阪南組合長)

泉佐野には、農業用水に利用している大きな池が2つあります。近年、水田が減っているにもかかわらず、高温と少雨により池は渇水状態で、放水制限がされています。30年余りの経験から、農作物の出来不出来は自然のちょっとした変化によると感じており観察の目をもつことが大切だと思っています。みなさんも是非自然の変化に注意をはらってみてください。



報告3 「コメ栽培農家からみた温暖化の影響」

佐保 庚生さん(農民組合大阪府連合会副会長、大阪産直センター代表理事)

・今年春先には遅い霜が降り、苗の伸長が遅れました。

- ・最近では高温障害を避けるため、イネの開花をずらすのに2週間ほど田植えの時期を遅らせる、高温耐性の品種を導入する、さらに夏場、水を入れる際に、水を深めにはったり、あるいは貯めずに流しっぱなしにするなどの対策をしています。
- ・夏から秋にかけての高温によって、乳・心白粒の発生、粒そろいの悪化だけでなく、カメムシなど病虫の被害による品質低下もおきています。
- ・米は生きもので玄米は15℃以下で保冷保存されています。消費者が精米された米を、高温状態に置いておくと急激に変質してしまいます。



講座に参加して 講演、報告、質疑応答を通じ、それぞれ立場の異なる方々のお話を伺って興味深く感じました。

山田 直樹(CASAボランティア)

*1 <http://www.jma-net.go.jp/osaka/kikou/ondanka/ondanka.html>